

職員室から・・・

2009・10・16

加藤由美子

○のばら祭が近づいてきて、職員室では担任たちがみんな、子どもたち一人ひとりの絵を見ながら、「あ～～、この絵、可愛い!」「うわ～、この目、いいな～、表情が生き生きしてる」「これはね、〇〇〇って言って、おしゃべりしながら描いてたんです～」「幼稚園のすべり台、緑のところがあるから、ちゃんと描かれている、よく見てるね」「子どもの絵っていいよね～、大人が子どもの絵を真似して描こうとしても出来ないですよ～」等々話をしています。

子どもたち一人ひとりの絵を大事に大事に思って、子どもたちの絵を見ている担任たちの姿をみていると嬉しくなります。

子どもたちが描いた絵は、子ども時代にしか描けない、貴重な絵なのです。一本の線でさえ、それぞれの個性があって魅力的なものです。

子どもたちの絵は、一枚一枚に『想い』が込められています。幼児期の絵は想いが含まれていますから、見る人に訴える力があるのでしょうか。

細い線、太い線、たくさん重なった線、子どもたちの心が表された世界でたった一枚の絵、宝物の絵なのです。

本物により近い絵、正確に描かれた絵がいい絵、という見方はやめて、子どもの想いによって描かれた絵、その想いを理解してじっくり時間をかけて見ていただきたいと思います。すると、子どもの絵の可愛さ、素晴らしさが伝わってくると思います。

30数年前のこと、子どもに好きなように絵を描かせ、子どもの絵にあらわされた心理的状态や身体の状態等をみる研究会にであって、驚きと拒否感でいっぱいになってしまったことを思い出します。

その頃は、子どもにいかにか絵を描かせるか、より上手に絵を描かせるにはどんな言葉を用いて、どんな気付け方をすればいいかという、保育者が中心になって子どもに描かせるということしか知らなかったのです。

絵は、子どもに描かせるのではなくて、子ども自身が描くものであり、子どもの心が表されるものであること、そして、“大人が見て上手に見える絵”を描かせようとするものの意味のないことに気付いてからは、子どもが心を開放してのびのび表すことが出来ることの方が重要であると考えようになりました。幼児期に、心を開放して、感じたこと想っていることを、思い通

りに表現できるようにしておくことが、大きくなってからの真の表現力になると思っています。

○「幼虫見つけたよ、来て!」と白ばらのR君に言われてついていくと、平たい入れ物に砂が入れられ、大きな石や木切れが立てられ、まるで箱庭みたくに作られたものがありました。その箱庭状の砂の中に幼虫が何匹も入っていたのでした。捕まえては入れ・・・としていたようで、入れた場所をよく覚えていて、ここに一匹と掘り当てて、「ここにも一匹・・・ね!」と次々と幼虫を見せてくれました。幼虫をよく見たあとで、また、幼虫を砂の中に入れてあげていました。ちょっとした幼虫王国みたいでした。

○大きなままごとの家の中では、雨どいをつないだ水路が作られていて、水路をたどっていくと、あら、あんなところまでつながってる!!と驚くほどの素敵なものでした。

高いテーブルの上からちょっと低いテーブルの方へ雨どいが乗せられ、その雨どいから流れる水が、低いテーブルの下にある雨どいに落ちるようになっていて、テーブルの下の雨どいに落ちた水はつなげられた雨どいを流れて、ままごとの家の外へ出流されていました。長いながい水路、そこに赤ばらさんのT君と白ばらさんのYちゃんがジョウロに水を汲んできては流し、汲んできては流し、流れるさまを見ては顔を見合わせて、時折、松の葉を流して「そうめんね」と言って笑い・・・本当に楽しそう・・・途中で雨どいが外れてしまいました。そのときふたりは、べーと舌を出して顔を見合わせて、ハハハ・・・こうして心ゆくまで遊べば、満足して、心が満たされて、気持ちも柔らかくなります。そして一緒にやった友だちにいつそう親しみを感じて、また明日やりたいね～という気持ち(意欲)をもちますね。こうして水の性質や流れを作るための角度を知り、流れる速さを体感して学んでいる子どもたちです。

